

**参加者募集 No. 03-19講習会** **自動車開発における人間工学の理論と実践**  
**—ドライバの特性を考えた車づくり—** Intensive Course

問合せ先：シンポジウム事務局 Tel. 045-453-2225

[URL] <http://www.jsae.or.jp/sympo/2019/scdl.php> E-mail: [sympo@jsae.or.jp](mailto:sympo@jsae.or.jp)

**日時** 2019年9月12日(木) 9:45～17:15  
**会場** 産業技術総合研究所 臨海副都心センター  
**企画** ドライバ評価手法検討部門委員会  
 ヒューマンファクター部門委員会  
**協賛(予定)** 産業技術総合研究所, 日本人間工学会,  
 ヒューマンインタフェース学会, 日本機械学会  
 計測自動制御学会, 日本感性工学会  
 日本交通科学学会,  
 日本大学生産工学部自動車工学リサーチ・センター  
**定員** 110名

**参加申込方法**  
 シンポジウムページ【URL】<http://www.jsae.or.jp/sympo/2019/scdl.php> よりお申込みください。  
 (請求書払いまたはクレジットカード決済より選択可)

**参加費** (消費税込・サブテキスト1冊込)  
 正会員 16,200円 学生会員 7,240円 賛助会員 22,680円  
 一般の方 32,400円 協賛学協会の会員 22,680円  
 \*本講習会は、「自動車技術ハンドブック 第3分冊:人間工学編」をテキストとします。  
 本ハンドブックをお持ちでない方は、別途4,000円でご購入できます。  
 当日ハンドブックも忘れずにご持参ください。

**参加のおすすめ**

自動車開発における人間工学の基礎知識・方法、具体的な実践事例を示すことで、初学者や若手技術者等のスキルアップを目指します。テキストには自動車技術ハンドブック人間工学編を用い、講習会後の知識の定着を効果的に進められるようにします。インタラクティブセッションでは、活用上のポイントや注意点を講師と直接議論できます。本講習会で自動車人間工学への理解の深化を期待できます。



ドライバ評価手法検討部門委員会 委員長 佐藤稔久氏



ヒューマンファクター部門委員会 委員長 鈴木宏典氏

**プログラム**

9:45	開会挨拶・講演会の主旨説明 司会 <b>ドライバ評価手法検討委員会 委員</b>	産業技術総合研究所 佐藤 稔久氏
9:50	モビリティサービス時代の人間工学	産業技術総合研究所 赤松 幹之氏
10:15	休憩	
10:20	人間中心設計とユーザー理解の手法	芝浦工業大学 吉武 良治氏
11:10	休憩	
11:20	実験デザイン	慶應義塾大学 大門 樹氏
12:10	昼食	
	司会 <b>ヒューマンファクター部門委員会 委員</b>	
13:00	自動車人間工学における統計解析の基礎	愛知工科大学 荒川 俊也氏
13:50	休憩	
14:00	人間特性に基づいた視覚情報提示の視認性向上	北海道大学 渥美 文治氏
14:50	休憩	
15:00	人間特性を活かしたキャビン快適性向上	日産自動車 平尾 章成氏
15:30	休憩	
15:40	インタラクティブセッション 開発応用のためのポイント	日本大学 石橋 基範氏
	自動二輪ライダーの特性を考慮した二輪 HUD の研究事例	東京大学 伊藤研一郎氏
	高齢ドライバ特性に関する研究のポイントと実践	山梨大学 伊藤 安海氏
	ユーザビリティ評価と主観的評価法の基礎と実践	U'eyes Design 梶川 忠彦氏
	ドライバモデルの構築事例紹介	日本大学 栗谷川幸代氏
	自動車運転の人間研究に対する人間工学的取り組み	産業技術総合研究所 佐藤 稔久氏
	前庭動眼反射に着目したドライバ疲労要因解析—生体計測実験の一例—	豊田中央研究所 菅原 朋子氏
	安全システム開発に向けたドライブレコーダデータによる運転行動分析	成蹊大学 竹本 雅憲氏
	女性の不安解消に着目した視界・ドラポジ	マツダ 松葉 慶暁氏 / 藤村 絵梨氏
	眼球運動関連指標によるドライバモニタリング	甲南大学 山中 仁寛氏
17:15	閉会挨拶	日本工業大学 鈴木 宏典氏

◆インタラクティブ・セッションのポスターは写真撮影可 ◆プログラムは講師、会場の都合などにより予告なく変更となる場合があります。

※インタラクティブセッションについて  
 インタラクティブセッションでは、全講師が並行して講演用ポスターの前で話をします(学会のポスター発表の形態、1ラウンド20分×4ラウンド間に5分の小休止)、各講師と、Face to Faceで突っ込んだ議論ができることを狙っています。